

第1回学習・利用形態部会 発言要旨

鎌倉委員	<p>○調査結果で、都立に来ない理由として「地元の図書館で用が足りる」とあるが、自分の経験では、調べものをするには地元の図書館では「足りない」。</p> <p>○都立がポジショニングで特化するとしたら「都民にきちんとした調べる力をつけてもらう施設」だと思う。</p> <p>○潜在利用調査では見込みユーザーとして 20、40、50 代の女性がいる。世代の共通点としては「働いている女性」。また、現在この世代で在宅ワークが伸びている。キャリアを諦めない在宅ワーカーの調べものを支える仕組みを今後どう作っていくか。</p> <p>○40.50 代女性には主婦も。ライフスタイルごとに「女性」をキーワードにコレクションを考えていくということもあるのでは。在宅ワークも含め、子連れ利用の想定も必要。</p> <p>○市町村立図書館と県立図書館の関係は、かかりつけ医と大学病院の関係に似ている。「これは風邪じゃない」「もっと深く学びたい」というときに紹介されて行くような。</p> <p>○都立のアンケートで、レファレンスサービスを使ったことがない人 65%という結果に驚いた。ここが突破口ではないか。レファレンスを使えば仕事も時短になり、様々な視点の資料が集まるはず。</p> <p>○10-30 代の認知度が低い、というのもキーワード。アメリカではリーディングプログラムがあるが、日本では本の読み方は教えていない。10 代の子に「調べる喜び」を知ってほしい。</p> <p>○京都府立図書館では館内で行われる NPO の活動の中で、図書館員がライブでレファレンスをしている。DB の検索方法もその場で教えていた。そうしたサポートの中、参加者も「ちゃんとした情報が必要」と気づくことになる。</p> <p>○都立が出しているレファレンスのチラシは「へえ」と感じる。レファレンスの事例を毎日 SNS で出して、若者に拡散してもらいたいのではないかな。</p>
坂口委員	<p>○現在、個人利用者の満足度は高いが、これからはグループとしての満足度が求められるのではないかな。人が出合い、ワークをして、利用者自身が発信する、というように社会が変化していくのではないかな。ウィキペディアタウンのように。</p> <p>○都立は DB をものすごく持っている。それは大学的な要素。大学の関係者が DB を求めて都立に来る例もある。</p> <p>○活動のレベルアップを支えるのは司書だけではなく、レフェラル・プロフェッショナルが必要。知ではなくて人をつなぐ。</p> <p>○都立の優位性はストックではなく「活動」</p> <p>○ラーニングコモンズ的なしゃべっていいゾーンが必要。それがないまま、全体を「静かに」というのは厳しい。</p> <p>○生涯学習を支えるサービスを。放送大学テキストをすべて置いて、学びを支えるというのは都道府県立がやるべき。</p> <p>○元気な高齢者が増えている。アクティブシニアを対象にしたサービスを。</p> <p>○いろいろなパターンの席、利用者自身が選ぶことができるバリエーションを持つことが求められている。</p> <p>○大学ではオープンスペースでの講義、というスタイルが出てきている。周りにも聞き耳を立てている。誰でも聞いていい、というスタンス。必ずしも「教室」でなくてもよい。</p> <p>○図書館の入口に、利用者同士が交流する情報板を置いておくといいかもしれない。</p>

中井委員	○都道府県立の中でも都立は別もの。東京という地域資料もあるだろうがスケール感が違う。相当な量の資料が集まっていると思うので、全国から利用者が来る可能性がある。これまで来なかった人へのサービスを考えたほうがいい。
	○これまで来なかった人へのサービスを考えていく際には、貸出の是非は長期的な目標かもしれない。
	○国会図書館－都道府県立－市立、というヒエラルキー的なものは壊れているのではないか。国会図書館がデジタル化を進め、小さい図書館からもつながる。都道府県立の位置づけはどうなるのか。
	○（来館での）図書館利用者は維持したい。
	○図書館とカフェ、という動きがあるが、いま、図書館の利用がちょっと「軽い」。本を無料で借りる場所から活動のレベルが上がっていく、その受け皿が必要ではないか。
	○（レファレンス利用の低さについて）調べ方をわかっていない。小学校くらいからそういう使い方を教えないと無理。最近では、公共図書館をつくる時は、必ず学級訪問対応スペースを作る。
	○考える力が落ちてきている。考える以前にすぐ動画に接することができる。ただ、本当のプロはやはり読み、調べる。発想や創造の力が落ちるのはまずい。
	○図書館は何の分野でも「いける」。いろいろな活動の接着剤になれるはず。
	○飲食について。今はデジタルもアナログも使いながらの勉強。かつ、飲み物も飲みながら、会話もしながら、というスタイル。
	○ラーニングcommonsでも開架でも、7割は一人利用。一人利用であっても「ざわつきの中の落ち着き」を求める人もいる。
	○ラボやスタジオがある図書館がある。自分たちの活動で何かを作りたいときに、印刷機などを使ったり、撮影をすることができる。またそういったスペースが「見える化」されているところもあり、人同士のつながりも生まれてきている。SNSもあるが、そうしたアナログのつながりのきっかけになるのもいいのでは。
	松本委員
○大学的な要素はあるが、来ないといけないうが大変。VPNで使えるといい。	
○国会図書館との棲み分けをどうするか。国会はデジタル化が進んでいる。ストックの部分で都立の優位性は失われていく。	
○道府県立図書館では、利用者が直接予約をして、地元に取り寄せるスタイルが広がっている。これはどう評価されるか。	
○都立の本は平均単価が高い。そこが差別化されている部分ではあるが、高度すぎる面もあるのではないか。ある主題を調べに来る人にとっては「（入門的なものも含めて）都立に行けば何でも調べられる」という意識が強いのではないか。もう少し簡単な資料があってもよい。	
○（レファレンス利用の低さについて）ネットでの検索だけでなく他にも調べ方がある、ということを知らない。	
○都立は基礎自治体に対して、職員を育てる、相互貸借や協力レファレンス等の事例を「輸出」していくことが必要ではないか。	
○図書館が「楽しそう」という場の創出が大切ではないか。例えばB&Bのような。	
○主題をキーに調べに来る人にとって、図書と逐次刊行物が分かれているのは、それでいいのか？	
○調べ方を知らない人でも情報を発見できるような仕組み、ディスカバリーサービスのようなものがあってもよい。	